

グリーン・ツーリズムにみる家族のかたち — 農林漁家民宿開業の事例 —

山崎真弓

グリーン・ツーリズム四国結びのネットワーク

1. グリーン・ツーリズムとは

(1) グリーン・ツーリズムとは

地域振興や農山漁村振興の計画書の中には、必ずといってよいほど「グリーン・ツーリズム」という言葉が現れる。「グリーン・ツーリズム」を施策として推進している農林水産省の定義によれば、「グリーン・ツーリズム」とは「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」とされているが、「地域振興・農山漁村振興」の文脈においてはその「余暇活動」による都市からの交流人口を取り込むことによって地域を活性化させようとする農山漁村側の活動を示す用語として用いられている。

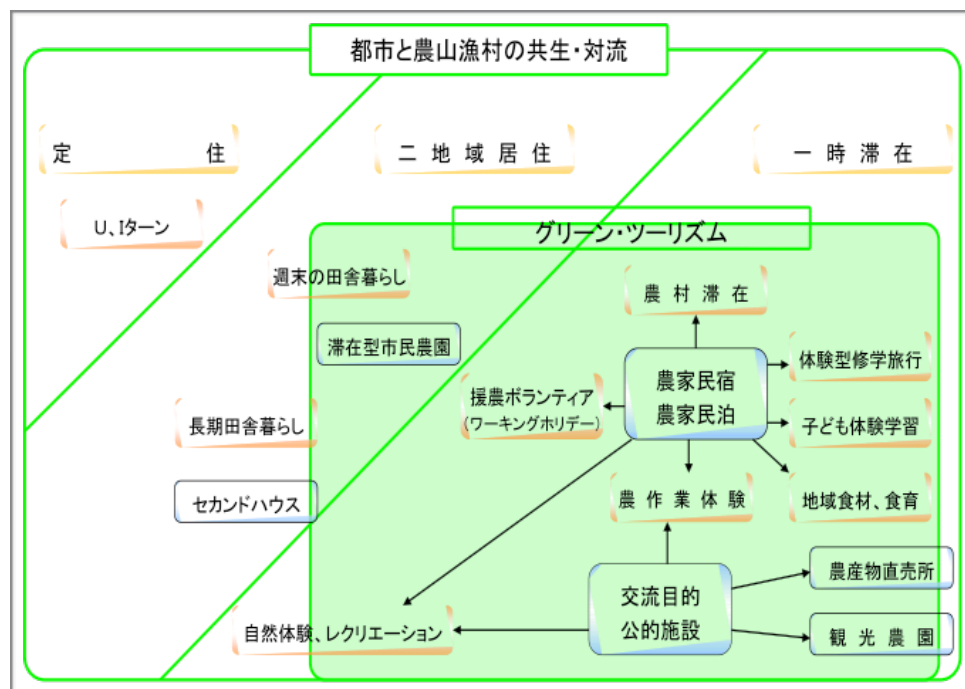


図1（農林水産省のホームページサイト¹より）

¹ http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/index.html 平成25年6月19日

具体的には、農産物直売所、観光果樹園、日帰り市民農園、滞在型市民農園、体験型観光での農産物収穫体験、農家民宿や漁家民宿など、また農山漁村体験型修学旅行や小学生が農山漁村で一定期間滞在し産業・くらし・文化を体験する「子ども農山漁村体験プロジェクト」²もグリーン・ツーリズムの中に含まれる。(図1)

グリーン・ツーリズムが施策として推進されるその背景には何があるのか、また、なぜグリーン・ツーリズムによって「農山漁村」を「活性化しようとする」、または「しなければならぬ」のか。国土とそこに住む人々という視点でたどってみる。

(2) 国土計画に見るグリーン・ツーリズム

全国総合開発計画に「グリーン・ツーリズム」が登場するのは「21世紀の国土のグランドデザイン」(1998年)からであるが、その前提となる「農山漁村の重要性」についての記載は第三次全国総合開発計画(三全総)(1977年)にさかのぼる。三全総では、「農山漁村を国土³の管理者」として位置づけ「農山漁村の過疎化は、国土の管理主体を失うことによって国土の荒廃をもたらす、国土保全の観点からも対応に迫られている。」として「条件不利地域の農山漁村」を維持することの重要性が示された。

続く第四次全国総合開発計画(1987年)では「農山漁村」は青少年に対する教育や都市住民の保養等国民の交流空間としての役割を担っている」と農山漁村が持つ機能をより広く「多面的役割」と捉えた。そして、「グリーン・ツーリズム」は「21世紀の国土のグランドデザイン」(1998年)に、「国土の管理者であり、国民の交流空間としての役割も担っている重要な農山漁村」を維持していくための取組みとして登場する。さらに「国土形成計画」(2008年)では、「農山漁村の個性や魅力を国民全体の豊かな生活を支える共通の財産として、地域住民だけでなく都市住民も含め享受していく」ことができるよう「グリーン・ツーリズム等の取組を推進する」ことが必要であるとされた。

(3) 農業政策の中のグリーン・ツーリズム

農業白書に「都市と農村」に関する記述が見え始めるのは1978年の「地方都市との連携」からである。1982年には現在使われている「都市農村交流」という記述が現れ、1983年には「都市と農村の交流を通じたむらづくり・まちづくり」という踏み込んだ表現になる。1990年からは「都市と農村の交流」が話題の中心として連続して登場してくるが、まだ農林漁家の経営の多角化には踏み込んでいなかった。

それが大きく変わる転換点が1992年、ガット・ウルグアイラウンドの受け入れによる農産物市場の国際化・自由化である。政府が国内農業への影響を極力緩和するための様々な対策を講じるなかで、生産基盤の弱い中山間地域の生き残り対策として関心を集めたの

² 総務省、農林水産省、文部科学省が連携して2008年から実施されている事業

³ 「長い歴史を通じて、数億にのぼる人々の国土での営々たる営みと自然の営みとが有機的に総合された結果としての蓄積が今の国土を形成した」(三全総：本文)

は、「農林業を中心として、その関連する領域や産業との融合を図り、地域として総合的な活力を高める」施策として成功しつつあったヨーロッパのグリーン・ツーリズムであった。1992年の「新しい食料・農業・農村政策の方向」において、日本で初めて施策の中で「グリーン・ツーリズム」という言葉が用いられた。その後、グリーン・ツーリズムは主として農林水産省が推進していくことになる。

(4) 観光政策の中のグリーン・ツーリズム

2007年に施行された「観光立国推進基本計画」には新たな観光旅行の分野「ニューツーリズム」のひとつにグリーン・ツーリズムが挙げられ、農山漁村は「良好な景観や歴史的風土に恵まれた」観光資源として評価され、「新たな旅行需要の創出による地域の活性化等のため、極めて重要である」とされた。また、2009年には農林水産省と観光庁が連携した「ようこそ！農村」プロジェクトが始まった。これに関連し観光関係者と農村地域が連携し、新たな旅行ニーズに対応した地域のグリーン・ツーリズムの取組を推進する「グリーン・ツーリズム推進連絡会議」が設置された。

(5) 農山漁村に住み続けるということ

これらの動きを追っていくと、農山漁村を評価する二つの視点に気づく。ひとつは「国土の守り手」、「多面的機能」と表現される「機能」、いまひとつは「都市住民の癒し」、「良好な景観や歴史的風土」に代表される「資源」である。そして、その評価に見合う農山漁村である条件として、「そこに人が住み続けること」が浮かび上がってくる。

農山漁村のくらしは自然との接点にある。日本の自然条件は、土砂崩れを頻繁に起こし、植物の生育は速度と量で人のくらしを圧倒する。人が住まなくなった集落が植物におおわれる様子を「荒廃」と呼ぶがそれは自然による「奪還」でもある。そして「奪還」はいとも容易く行われる。それほどに手ごわい自然と折り合いをつけるかたちで暮らす姿は今もなお全国の農山漁村にある。

写真1は、水路に落ちてきた岩を取り除いているところであり、四国の山間地域で「田役(たやく)」と呼ばれる田んぼへの灌漑水路の修繕と草刈り、溜まった泥等の掃除の風景の一つである。山間地域では小さな土砂崩れは日常的に起き、重機の持ち込みができない場所でこうした土砂(といっても比較的大きな石もある)を取り除くのはかなりの重労働である。写真2は水路に溜まった土砂を浚っているところである。しかし、水路をふさぐのは土砂だけではない、日本の気候で盛大に繁茂する草の量も半端ではなく、田んぼ周りの草刈りは必須である。

山間地域の高齢化が言われだして久しいが、こうして高齢の方々が、写真3のように、斜面での草刈りなどをされている姿を見ると実感として高齢化の実態が迫ってくる。次の写真4と写真5は、水路の'before and after'ということが出来るかもしれない。田役が終わった後、きれいになって、水の流れもスムーズになった水路が写真5である。もっとも写真4を'before'といたいところであるが、'after'は1年もしないうちに'before'の姿にも



写真 1



写真 2



写真4



写真 3



写真5

どってしまう。

30数戸しかないこの集落には3つの灌漑水系があり、それぞれに田役が毎年繰り返されている。水路を通った水は田んぼをくまなく潤す。稲を育てるとともに水源を涵養し、景観を形作る。集落の住民が行う作業はインフラの保守だけではなく、神社の祭りもある。つまり守るべき「国土」は「環境」や「文化」とも言い換えることができる。農山漁村が「国土の守り手」になり続けるためには、どう考えても一定の量（人口）と質（スキル）⁴を伴った住民が必要である。

（6）都市と農山漁村双方のニーズを満たす有効なツール

田役の労働を見ていると、「国土の保全」のために農山漁村に（量と質を備えた人口が）住み続けてほしいということは、まるで受益者サイドからの「要請」のように思える時がある。しかし一方で、果てない重労働があってもなお、この地に住み続け充実した生活を全うしたい、この地域とくらしがいつまでも続いて欲しいと願う人々がいる。

「自分がいずれ死ぬのは当たり前やけど、この集落がなくなってしまうのを思うと夜も寝むれん」というある山村のお年寄りの言葉を聞く。いわゆる「ふるさと」を知らない・持たない人にはわからない気持ちかもしれないが、自分を包んで未来まで流れるはずだった人と時の流れが無くなると言いかえれば、どれほど心細いことなのか想像はできる。

つまりグリーン・ツーリズムは、国土の維持や都市住民の余暇活動へのニーズと、「ここで住み続けたい」という農山漁村住民の願いが、「農山漁村の維持」という一点で合致し、お互いに再生産しあえる優れた農村地域活性化のツールといっていよい。冒頭に、中山間地域の振興計画などの中では定番のように用いられていると紹介したが、農林漁家個々もまたグリーン・ツーリズムに期待を寄せ、自らの家業・人生の中に取り入れようとしている。そういう農林漁家の取組みの中で代表的なものに「農林漁家民宿」がある。

2. 農山漁村のくらしと農林漁家民宿

「農林業センサス」と「漁業センサス」を見ると、全国の農林漁家民宿は4,000軒に迫り、年間宿泊数1,000人を越す経営も登場している。特に農家民宿は「2010年農林業センサス」で2005年の34%増となっており、条件不利地域、中山間地域では「農林漁家民宿」の開業が進んでいる。

（1）全国の農林漁家民宿の状況

⁴ ここでいう「質（スキル）」とは、自然と共生しながら農山漁村でくらす能力を指す。鎌や鍬の使い方を始めとする農作業、小規模な土木工事、家屋や石垣の修繕方法、里山の管理方法、さらに地勢の理解など。また、農産物加工技術や文化の担い手としての伝承行事の知識や経験等も含まれる。農山漁村（に住む人びと）にはこのようなスキルが備わっているのが常態である。言い換えれば、備わっていないと生活に支障が出るのが農山漁村である。

本稿では、農林漁家民宿おかあさん100選アンケート結果⁵（以下、「100選アンケート」という。）から日本の農林漁家民宿、経営とその家族の姿を見ていきたい。ここでは回答者は民宿経営者である「おかあさん」、つまり女性経営者⁶である。

「農林漁家民宿の所在地」を見ると、「おかあさん」回答者が100選アンケート全体では92名（92%）であり、また回答者63名中の58名（93%）が地域振興立法5法（特定農山村法、山村振興法、過疎地域自立促進特別措置法、半島振興法、離島振興法）の指定地域で民宿を経営しており、あらためて農業生産等や生活基盤の整備において条件不利な地域での取り組みであることが分かる。

（2）農林漁家にとっての農林漁家民宿開業の意味

言うまでもなく農林漁家は農林水産物の販売によって収入を得ている。これに対してグリーン・ツーリズムでは、「モノが動くのではなく人が移動する」ことによって、景観、文化、農林水産業の商品にならない部分（作業も含む）など、「市場流通」に乗せることのできないものが経済効果を生むとともに、ひととひととの交流が様々な意味で地域の活性化につながる（図2）。

地域経済への具体的な波及効果を図示したものが、図3の「共生・対流事業が農家経済にもたらす効果事例」である。この事例では、農家民宿開業前は、農林業収入400万円、所得210万円であった経済主体が、農家民宿開業後、農林業収入は275万円、所得148万円になるものの農家民宿収入600万円、農家レストラン収入350万円が加わり、最終的に農林業関係収入1,225万円、所得530万円、開業前に比べて320万円の所得が増加している。

ここで見逃してはいけないのが、地域経済への波及である。地域経済に対して農家民宿や農家レストランの食材やその他サービスの購入で195万円の経済取引が新たに生まれ、さらにパート雇用が発生し、所得として36万円が生み出されているのである。これらの効果だけでも231万円の波及効果が生まれている。農林漁家民宿が、その家だけにとどまらず地域全体に影響を及ぼすことがよくわかる⁷。しかしそれは一方で、従来まで地域内になかった「人の入り込み」が始まることを意味している。

⁵ この「アンケート調査」は2010年2月～3月、2010年4月～5月にかけて「農林漁家民宿おかあさん100選」に選定された100名の農林漁家民宿経営者に対して実施し63名から回答を得たものである。「農林漁家民宿おかあさん100選」とは、2007年～2009年に農林水産省と観光庁との連携により「国内に十分な質が保たれた農林漁家民宿の普及・定着が図られること」を目的に実施されたものである。全国から都道府県等の推薦を経て100名の女性経営者が認定された。彼女らの協力による農林漁家民宿の質の維持・向上に係る情報交換会等の開催やネットワークの構築等の取組を通じて、国内に十分な質が保たれた農林漁家民宿の普及・定着を図ることを目的にしている。

⁶ ここでの経営者は営業許可の名義等ではなく、実質的な経営に携わっていることを指す。

⁷ 山崎真弓・中澤純治「持続可能な都市農村交流（農林漁家民宿）のために—高知県に見る経済活動としてのグリーン・ツーリズム—」『高知論叢（社会科学）』（高知大学経済学会）第92号（2008年7月）：57-102

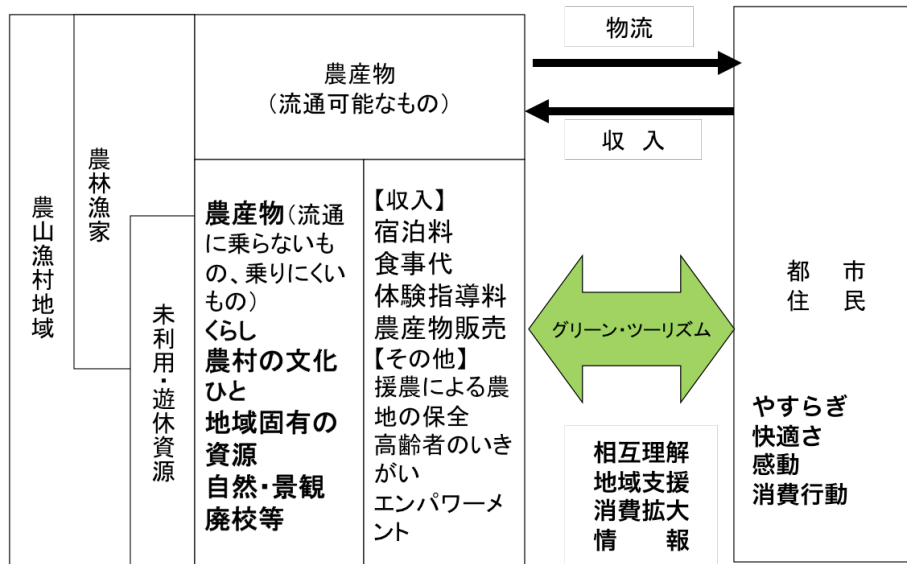


図 2

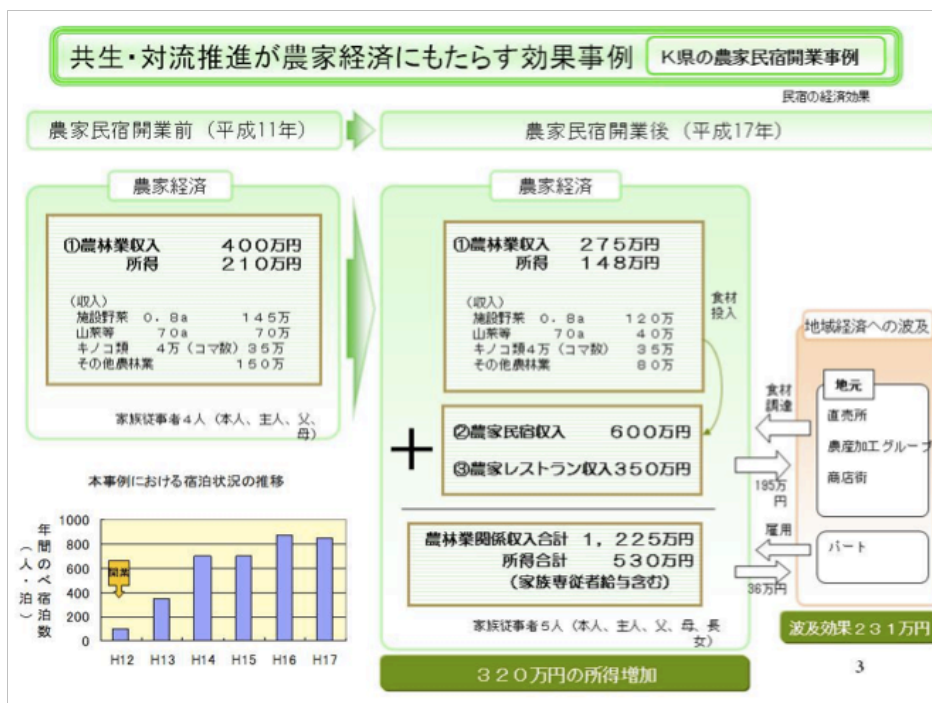


図 3

(3) 農林漁家民宿で過ごす時間

農林漁家民宿をよくご存じない方も多いと思うので、宿泊客の立場に立って、その視線をたどるかたちで実際の農林漁家民宿の画像をご紹介します。

①自然環境、農山漁村の景観

宿泊客はまず、農山漁村の空間の中に入ってくる。自然そのもの、農林漁業、くらしの風景は都市住民には珍しく、あるいは懐かしい風景である。

川の流れの美しさ（写真6）とともにこのような素朴な橋が今も日常の用に供されている。かわいい生き物は同時に食べ物でもある。たまたま牛の出産に立ち会った子どもたちが感動で涙ぐむ場面もあったという（写真7）。大きな河川のデルタ地帯の今日の主要な米の生産地が形成されたのは近世以降のことである。山村の山肌には、平野に広がる大水田よりも古い歴史を持つ棚田がある（写真8）。干し柿を干す風景（写真9）長野県飯田市の「柿すだれ」は暮らしが作り出す景観である。

②くらし体験

農林漁家民宿では、宿泊客に自分たちのくらしを体験するプログラムを提供している。プログラムという言葉は固が、オーナーの作業の手伝いという形で、都会ではできない経験ができる。

手を動かしてつるかごを作るという体験（写真10）。自然の素材は均質でなく作業の創意工夫を要する。自分だけの世界に一つの「おみやげ」になる。

竹を切り出し、節を抜く作業を体験する。刃物を使ったことのない子どもたちにはスリリングな体験である（写真11）。家の前で魚が釣れる。釣った魚は、民宿のおかあさんが晩ご飯にしてくれる（写真12）。

③農山漁村の食文化体験

農産物加工や、食事作りという「食」に関わる体験では、できあがった料理や加工品はそのまま自分たちの夕食になったり、おみやげになったりする。手のひらに感じる生地の感触と食べる時ののどごし、香り、五感が満たされる「ソバ打ち体験」（写真13）などがある。

自宅でもちつきをする家庭は全国的になくなっている。まるめる手触り、つきたてをほおばる、子どもだけでなく大人にとっても楽しい体験である（写真14）。野菜がどう育つか、どのような姿をしているのか知らない人が多くなっている。土から生える野菜自体がめずらしい。トマト嫌いの子どものがもぎたてを口にして、「美味しい、これ本当にトマト？」と言ったという（写真15）。都市部では魚が切り身として店頭に並ぶようになった。魚をまるごと料理をする機会も少ない。漁師の捌き方は大胆で鮮やかである（写真16）。



写真6 四万十川にかかる沈下橋（ちんかばし）



写真7 牧場の仔牛



写真8 棚田



写真9 柿簾（かきすだれ）

GEO-COMMUNICATION Working Paper No.9

March 15, 2014

ISSN 2186-9820



写真10 つるかご細工



写真11 竹材の加工



写真12 魚釣り



写真13 ソバ打ち



写真14 もちつき



写真15 菜園



写真16 魚を捌く

Family formations in green tourism. Tourist ventures in agriculture, forestry and fishery.

④客室、室内空間

農林漁家民宿の建物や客室は様々である。農家の自宅の中の客間あるいは台所や浴室付きの「離れ」「隠居部屋」が利用される場合や宿泊棟を新築する場合もある。

家族の気配を感じながら客間に泊まった、宿泊客の思い出ノートには「里帰りしたような」という感想が綴られている（写真17）。囲炉裏は宿泊客に人気がある。囲炉裏端は、調理しながら、暖を取りながら、炭火を眺めながらそぞろに過ごす。都市の人に人気の空間と時間である（写真18）。新築と言っても、地域の木材で、地域の建築様式で建てられている（写真19）。

伝統的な和室だけではなく、洋室の場合もある。客室として新築したものもあれば、独立して家を離れた子供部屋を活用している例もある（写真20）。民宿の客間の調度、備えは地域色、風土、くらしぶりを反映している。写真21は、漁師の家の床の間で多種多様な神々が丁寧に祀られている。板子一枚下は地獄といわれる漁船の長旅を案じる家族の思いが伝わってくる。オーナーの父親が建てた自宅と宿泊用に利用しているもの（写真22）。建築当時の流行の先端だったベンガラ染めの柱は宿泊客に好評である。



写真17 家の客間を客室としている



写真18 古民家



写真19 新築したもの



写真20 洋間



写真21 漁師の家の神棚



写真22 時代を映す建築様式

<宿泊客に最も人気がある民宿の食事>



写真23 夏～秋の農家民宿の夕食



写真24 野菜や山菜のヘルシーな献立



写真25 郷土料理「さつま」

⑤食事

農林漁家民宿でもっとも人気のあるのが食事である。新鮮な食材、手作り、名人の味が、宿泊客に単に「おいしい」以上の何か、食べ物の本来の味、健全な食のあり方を感じさせている（写真23）。農家の菜園から採れたものがそのまま食卓に並ぶ写真24の山菜、こんにゃく、しいたけ、ミョウガ、ハスイモを用いた田舎ずしをメインにした献立は健康志向の都市の人に喜ばれる。愛媛県南予の郷土食「さつま」（写真25）は、新鮮な魚だからこそできる料理である。みかんの皮とネギを飾り美しい。さて、農林漁家民宿で過ごす時間のイメージが頭にうかんだところで、あらためて、農林漁家民宿を開業し営業するとはどういうことかを追う作業にもどりたい。

3. 農林漁家民宿の開業と家族の姿

(1) 開業のきっかけ、動機

条件不利地域、中山間地域の農林漁家にとって所得確保のための兼業は珍しいことではない。農林漁業と地域の商工業、あるいは行政、団体勤務との兼業は多い。また地域内に観光やレジャー資源があり、そこへ来る宿泊客需要に対して、宿泊や飲食を提供する副業は古くから行われてきた。

しかし、農村余暇活動、農山漁村と農林漁業の体験そのものが主となるサービス業は、全国的に見て未だに少数派である。農林漁家民宿の経営者達は、どのような思いで、またどのようにして開業に至ったのだろうか。

「100選アンケート」結果からは、農家の女性が農山漁村や農林漁業の活性化を目指し、自らの自己実現の夢も込めて開業に踏み切った様子が見て取れる（表1）。

表1	【複数回答】
農林漁家民宿の開業の理由	%
⑦地域の食材を活かしたい	76.2
⑩地域の活性化を進めたい	74.6
④自分の料理を提供したい	73.0
⑤農林漁業の良さを体験して欲しい	73.0
⑭生きがいを感じる仕事をしたい	73.0
⑧都市の方のふるさとになりたい	69.8
⑫農山漁村を好きになってほしい	69.8
⑨都市の人、子どもを受け入れたい	65.1
⑥地域の文化を体験してほしい	58.7
⑪地域内にの宿泊できる場所になるため	57.1
⑮農林水産業の実態を知って欲しい	57.1
①家計の助けにしたい	52.4
②使っていない部屋を活かしたい	47.6
③伝統的な建物を活かしたい	36.5
⑬自分名義の所得が欲しい	15.9
⑯その他	3.2

（２）農林漁家民宿開業の際の課題

開業に伴う課題は大きく分けて３つある。ひとつめは法規制の課題である。農林業にサービス業が取り入れられたことにより、グリーン・ツーリズムの実践者は今まで関わりの無かった法令規制や制度に直面している。農林漁家が開業する場合は一定の緩和はされているが、複数の法律が関わる許可の手続きは、今も煩雑である。

ふたつめは経済面の懸念である。法規制とも関連するが、安全対策、構造基準を満たすために、また客室の快適さのための改修はかなりの支出を伴うことがある。

みつめは家族や地域住民との関係である。民宿は、「我が家」すなわち同じ家屋の中に、あるいは、少なくとも同じ敷地内に宿泊客を泊めることになる。家族の同意なくしては進めない取り組みである。

（３）開業に対する家族の意見

開業にかかる家族の反応は表2のとおりである。80%近くは条件付きにしても「賛成してくれた」ようであるが、11%は「（当初は）強く反対」されている。反対の理由は大きく分けて３つあり、「どのような人物か分からない人が家に泊まることへの」危険性に対する不安、「採算性はあるのか」、「家の改修等のために融資を受けて返済はできるのか」という経済面、そして「地域の人の反感を招く」という地域の住民の感情に対する心配であった。

（４）地域の中の身近な方の意見

家族の意見と同時に、民宿経営にのぞむその家の主婦「おかあさん」が、地域の中の身近な人の反応をどう受け止めていたかについても聞いてみた。その答えは表3のとおりであった。100選アンケートでは、地域の人の反応について、さらに、やや意地悪な質問をしている。その結果は、後日のエピソードを伴って興味深い。「民宿経営の課題とすること」のうち、地域の人に関するアンケート項目の結果は表4のとおりである。

数値を見る限り、それほど大きな問題ではなさそうな地域住民との関係であるが、2010年12月に開催された「おかあさん100選中国四国ブロックミーティング」で最も白熱したのはこの話題についての意見交換であった。意見交換会では、地域の他の住民との軋は「あって当たり前のこと」、「新しい取り組みにはつきもの」、とされ、「開業の前に集落全員にあいさつをして回るほど気を遣った」という発言に全員が深くうなづく場面があった。なるほど、アンケートでポイントが低かったのは「言うまでもないこと」だったからなのかと、あらためて確認したのである。

（５）開業の相談相手

このような「今までなかった事を始める人」へのいわれない圧力が当然のように存在する農山漁村において、前述した法規制のクリアや不安に押しつぶされそうな農林漁家の主婦を（心配や反対も含めて）支えたのはやはり「家族」である。

「100選アンケート」によると、相談相手は表5のとおりであった。まず一番多い相談相手は夫、それに両親や子どもを加えると半数以上の者が家族を相談相手としている。その他の相談相手として「地域内の仲間」「行政の担当者」もあるがやはり家族とともに開業を進めてきていることが分かる。

表2	
開業に対する家族の意見	%
①すぐに賛成してくれた	66.7
②条件付きで賛成してくれた	9.5
③当初は強く反対された	11.1
N A	12.7
計	100.0

表3	
開業の時の地域の身近な人の反応	%
①とても肯定的だった	17.5
②ある程度は肯定的だった	20.6
③無関心だった	28.6
④ある程度は否定的だった	6.3
⑤とても否定的だった	11.1
N A	15.9
計	100.0

表4	
民宿経営の課題と感ずること（地域の人に関する項目 抜粋）	%
⑭民宿をやっていることに対する嫌み（あてこすり）を言われることがある	20.6
⑯民宿をやっていることで、変わった人のようにいわれる	14.3
⑰金儲け主義のように言われる	11.1
⑱民宿をやっていることが地域の中で一人勝ちしているように言われる	11.1
⑲特別な理由が無いのに、地域の方からお客様についての苦情を言われることがある	7.9

表5					
	相談内容別 回答数				
開業時の相談相手	資金面	誘客	献立	体験	地域への配慮
①配偶者（夫）	36	24	27	35	31
②実母	0	0	1	1	0
③実父	1	0	0	0	0
④配偶者の母	0	0	2	0	0
⑤配偶者の父	1	1	0	0	0
⑥子ども	0	2	2	1	0
家族 小計	38	27	32	37	31
⑦その他の親戚	0	0	0	0	0
⑧同じ取り組みをしている地域内の仲間	1	2	4	2	5
⑨地域内の知人	0	1	3	1	4
⑩同じような民宿を経営している先輩農林漁家	0	0	0	1	2
⑪行政担当者（市町村）	6	8	1	1	4
⑫行政担当者（都道府県）	5	5	1	3	1
⑬グリーン・ツーリズムの指導者（学識経験者、コンサルなど）	0	3	0	0	1
⑭その他	2	2	4	3	1
⑮相談相手はいない	7	5	14	8	5
N A	4	10	4	7	9
計	63	63	63	63	63

4. 開業に至る経緯と家族の関わり（事例）

多くの農林漁家民宿の開業の過程の中には、先祖を含む家族の希望の共有・継承という姿が見える。その特徴的な事例を三つ挙げ、紹介する。

（1）事例1 父祖代々引き継がれてきた郷土愛

民宿Aは山間地域の1集落40戸に満たない山村にある。過疎高齢化の地域の例に漏れず人口が減少し、地域の小学校はすでに閉校になっている。

オーナーaさん夫妻は県外から郷里に帰郷し、林業に従事してきた。aさんご自身も農林産物の価格低迷で苦労を重ねたが、同時に疲弊していく地域の姿にも心を痛めてきた。かねてから地域を元気にするための地域活動を進めてきたが、ある都市農村交流イベントで「このようなアクセスの悪い田舎に、たくさんの人たちが来たことに驚き」、「来てくれた人が宿泊できる場所を作ろう」と思うようになる。

自分の持ち山の杉を切り出して地元の大工さんと相談しながらログハウス風の小さな宿泊施設を手作りし平成12年に開業し、現在では多くのリピーターを含む多くの宿泊客を受け入れている。

民宿Aの開業が地域に与えた見逃せない影響は宿泊客の中から定住に至る人が4人出てきたということであろう。40戸に満たない集落での4人の増加はたいへん大きな変化である。また、Iターンした人々はそれぞれに集落内に溶け込み、これまでの経験や能力を発揮して活躍している

通常Iターンの定住に際しては家や土地の確保が大きい課題になるが、aさん夫妻の尽力によって地域住民の理解を得、受け入れを容易にした。農林漁家民宿が農山漁村定住のコンシェルジェになった事例である。

オーナーaさんは、長期間にわたって村長を交互に勤めていた二つの家系が結んだ婚姻関係の下に生まれた。学校林、集会所への土地、神社への山林の寄贈など、村内の重要な事業には必ず実家の貢献が刻まれている地域の中で成長してきた。aさんの生き方の根底にある郷土への貢献という使命感は、aさんご自身の言葉を借りれば「父や母の生き方を見て、おじいさんおばあさんの言葉を聞いて知らず知らずのうちに・・・」、父祖代々引き継がれてきたものといえる。

（2）事例2 家業、家族を守るためのチャレンジ

民宿Bの経営者bさんが農林漁家民宿開業を検討し始めたのは、自分の家の農業所得の動きに大きな不安を持ったことがきっかけとなっている。

bさんの家は農林業の複合経営で施設野菜と林産物が主な収入源であった。その施設園芸品目の価格はバブル経済の崩壊以降、下降の一途をたどるようになっていた。「このままでは3人の子ども達の進学もおぼつかなくなる」、そう悩んでいたaさんは農林漁家民宿の存在を知る。

農林漁家民宿の将来性はあるのだろうか、収入になるほどのお客さんは来るのだろうか

か。地域内、県内で前例のない取り組みにあたってもっとも心強かったのが夫の理解であった。bさんの夫は若いころヨーロッパ視察研修に行ったことがあり既にグリーン・ツーリズムや農家民宿を知っていた。それまで口には出さなかったが内心はこういう取り組みはいいなと思っていたので、bさんの提案を全面的に支持し、開業への検討が始まった。

その後夫婦で農林漁家民宿の先進事例を訪問して開業への気持ちを固め開業に至る。経営は軌道に乗り、3人の子どもたちは成人し結婚し地域に残った。後継者のいない農林家が多くを占める地域内では珍しい事例である。

子どもたちの「希望」を潰したくない一心で始めた一人の農家の主婦のチャレンジは子どもたちの就業機会を創出したというだけではなく孫やひ孫に囲まれた義父母の幸せも紡ぎだしている。



写真26 集落



写真27 建物



写真28 ご家族



写真29 民宿の全景

(3) 事例3 亡き家族の思いをつなぐ

民宿Cは、昭和10年代の貴重な建築物である。この家屋は経営者cさんの第二次大戦で若くして戦死した兄が自らの住居として建築したものであった。cさんの民宿開業は兄の希望の象徴であった「家屋」を活かしたいという思いから始まっている。

図4は二階の間取りである。2つの部屋と小部屋があり、並んだ二つの部屋は襖を取り除けば宴会用の広間となる。二十代の青年は生前「自分の披露宴では、この小部屋で花嫁のこしらえ（この地域の方言で、化粧や着付けのことを指す）をするのだ」と語っていたという。

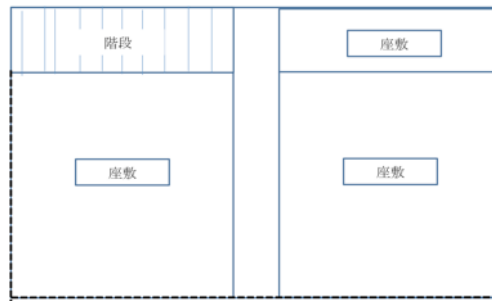


図4 間取り

兄は趣向を凝らした家に一度も住むことなく出征した。戦地に赴く朝、二階建ての新築の家の周りをゆっくりと一回りし、二階の窓（写真30・31：手作りで摺りだしたガラス窓、今では新たに作ることが難しいと言われている）をじっと見上げていた姿を多くの人が覚えていた。その覚えていた人々ももう今は故人となって久しい。

兄の希望や夢のこもったこの建物は、その後住む人がなく開業準備のころにはかなり傷んでいた。cさんはそれを補修し、調度品を整え、平成15年「農家民宿C」を開業。現在は、宿の特徴を表す「川遊び民宿C」として営業を続けている。民宿Cの開業を実質的に支え経営を担っているのはcさんの妻である。彼女がcさんと結婚した時点で、義兄はすでに故人であった。しかし彼女にとって義兄は、夢をかなえてあげたい大切な「家族」であるという⁸。

農林漁家民宿の開業の動機には、このような「（今は）ここにはいない家族」の希望をつなげたいという意志が少なからずある。「曾祖父が入植、開墾した果樹園を守りたくて」、「先祖が大切にしてきた築200年の家を壊すにしのびなくて」という、亡き家族や先祖の思いを守りたいという言葉をよく聞く。民宿Cは、その象徴的なケースである。全国多くの農林漁家民宿で、これらのエピソードと同様に、開業への過程の中に家族の

⁸ 嫁いできたばかりの頃、cさんの妻は、義兄の戦友だった隣人から「窓を見上げていた姿が忘れられない。この家に縁あって嫁いできたあなたが家を生かしてやって欲しい。」と頼まれる。彼女はその言葉が忘れられず、開業にこぎ着けた時は「なんともいえない達成感があった。」と語る。

関わりが見て取れる。前述したように「その地域で住み続け、充実した生を全うする」という人生のイメージは「家族のありよう」と無縁ではない。



写真30 建物



写真31 磨ガラス

5. これからの農林漁家民宿と家族（農林漁家民宿は何を継承していくのか）

最後に100選アンケートの結果から、農林漁家民宿の女性経営者が何に充足しているか見てみたい。

(1) 経営者は何に満足しているか

まず、農林漁家民宿の経営を継続していくために必要な要素を「モチベーションの維持」と「経済的な持続性」を軸に模式化する(図5)。経営者の「モチベーションの維持＝生きがいD」は「自分自身の好ましい変化A」と「家族・地域からの評価B」と「お客様からの評価C」に支えられている。「経済的な持続性E」は「採算性」と「継承(後継者)」で支えられる。さらに、「開業して良かったことは何ですか」という設問への回答に模式図の分類をあてはめると表6のようになった。

「モチベーションの維持＝生きがいD」に関する満足のほとんどで「ある」が90%を上回った。さらに「モチベーションの維持＝生きがいD」を支える「自分自身の好ましい変化A」と「都市住民から得られる支持と評価B」の満足度が高い。

農林漁家民宿で提供される料理や農林水産加工品の味や、加工の技術は、これまでは家庭内で家族を満足させるに止まっていた。それが宿泊客に喜ばれ感動されるということに、「民宿のおかあさん」たちは大きな満足を感じている。彼女たちは「こんな田舎料理に喜んでくれる」と謙遜するが、そう言いながらしっかりと自分の価値を再認識しているのであろう⁹。「お客さんの感動が嬉しい100%」、「農山漁村が評価されて嬉しい95.2%」という喜び¹⁰が「おかあさんたち」のモチベーションを支えていることを読み取ることができる。

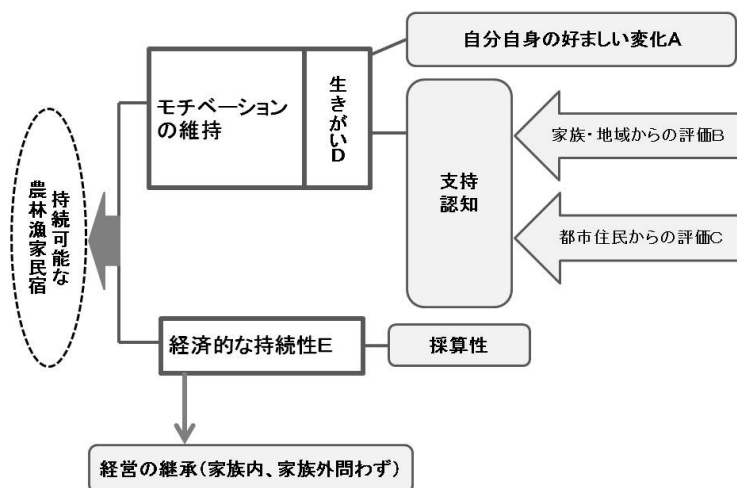


図5 農林漁家民宿による自己実現・地域の活性化：「持続可能」を支える要素

⁹表6の「⑩家族が増えたような気がする」という回答からは、「自分の手料理を喜び、自分たちとの会話を喜ぶ」宿泊客を、「家族のような」ととらえていることがわかる。

¹⁰「経済的な持続性E」を示す項目は75.5%以下に止まっており「生きがい(精神的な満足、自己実現)」が「経済的な満足」を上回っている。ここが現在、農林漁家民宿の課題となっている。

分類	開業してよかったこと	%
A	⑦交流によって自分が成長する	100.0
C	⑪お客さんの感動が嬉しい	100.0
A	⑨自分の地域の良さを確認する	98.4
C	⑫料理や食材への評価が嬉しい	98.4
D	②生きがいがあった	96.8
D	③お客さんが来ると楽しい	96.8
A	⑥お客様によって見聞が広がる	96.8
A	⑬自分の人脈が広がった	96.8
C	⑮農山漁村のくらしに価値があることを感じる	96.8
A	⑧農林水産業への誇りが持てる	95.2
D	⑭経済的な効果は少ないが心が豊かになる	95.2
C	⑭農山漁村が評価されて嬉しい	95.2
A	④毎日が充実している	93.7
D	⑯家族が増えたような感じがする	92.1
B	⑤家族の絆が強まった	88.9
B	⑩地域の人に喜んでもらえる	88.9
B	⑮地域内で自分の役割ができた	87.3
E	⑰民宿業は、農林水産業を続けていく支えになっている	87.3
E	①家計の助けになる	81.0
B	⑱同じ取り組みをする仲間ができた	81.0
D	⑮生活の中の技術（しめ縄づくりや農産加工、薪割りなど）への評価が嬉しい	76.2
B	⑭家庭内で自分の発言力が強まった	74.6
E	⑰農林水産物（農林水産物の加工品）が売れるようになった	69.8
E	⑱民宿の収入で自分名義の通帳ができた	55.6
E	⑲民宿の収入で家族の希望をかなえてあげられた	55.6
B	⑳子どもがよく帰省するようになった	52.4
B	㉑子どもが家に帰って暮らすようになった	38.1
	㉒その他	6.3

表7	
開業してよかったこと（家族関係抜粋）	%
家族の絆が強まった	88.9
民宿業は、農林水産業を続けていく支えになっている	87.3
家庭内で自分の発言力が強まった	74.6
民宿の収入で自分名義の通帳ができた	55.6
民宿の収入で家族の希望をかなえてあげられた	55.6
子どもがよく帰省するようになった	52.4
子どもが家に帰って暮らすようになった	38.1

表8	
自分の民宿開業は地域に貢献している	%
①思う	92.1
②思わない	6.3
N A	1.6
計	100.0

表9	
後継者(予定者を含む)	回答数
①娘	12
②息子	12
③娘の配偶者	1
④息子の配偶者	3
⑤親戚	0
⑥孫	0
⑦共同経営の仲間	0
⑧その他	0
N A	0
計	28

注：有効回答数 25名 ※重複回答あり

娘、娘の配偶者双方に○を記入したもの1名
 息子、息子の配偶者双方に○を記入したもの1名
 息子、娘、息子の配偶者に○を記入したもの1名

(2) 開業後の家族の変化

開業してよかったことのアンケートから「家族」の変化にかかることを抜粋してみた(表7)。子どもがよく帰省するようになった」「子どもが家に帰ってくらすようになった」について「ある(「おおいにある」+「少しはある」)」がそれぞれ52.4%、38.1%であり、農林漁家民宿の開業によって農林漁業の継続、農山漁村へのUターンが促されている。ポイントは低いように感じるが、後継者難に悩む農山漁村の現状を思えば大きな「変化」である。

「支持や評価」はまだ充分でないものの家族や地域の好ましい変化を実感していることがうかがえる。それは「あなたの民宿開業は地域に貢献していますか」というアンケートの問いかけに対する「思う(92.1%)」(表8)という答えとなって現れる。

ここで特に注目したいのが「後継者」¹¹についての回答である（表9）。「息子」や「娘」というごく一般的な回答に混じって「息子の妻」が現れる。農林漁家にとっては農地、山林、船舶などの生産資本と財産が不可分に「息子や娘」、あるいは「家業の跡取りとしての娘婿」に相続されていくのが通例である。「息子の妻」は、そうした相続とは異なり、「民宿の経営」という能力に基づく継承が示唆される。農山漁村の継承、後継者の流れにちょっとした地殻変動が起きているのではないか。それがうまく回っていけば、「農林漁業の経営多角化＝グリーン・ツーリズム」は、「家の後継者」ひいては「農山漁村の後継者」の選択肢を広げることにもつながっていくのではないだろうか。

（3）次代に引き継がれていくもの

アンケートの結果からは農林漁家民宿の経営者達が自分たちのくらしや産業の価値に気づき、生きがいを感じて民宿を続けている姿が見える。それは自分と家族と地域社会に好ましい変化をもたらす実感を伴っていた¹²。

農林漁家民宿の「希望」は次世代にどう引き継がれていくのだろうか。ある若き後継者が今後の自分の生き方と民宿経営を語る言葉を引用したい。

- ・お客さんに喜んでいただける宿づくりをしていきたい。
- ・農業や食の価値を伝えて行きたい。
- ・父より農業を、母より料理を伝承していく。
- ・宿の質を向上し、田舎のイメージを変えて行く
- ・地域の若い人とともに魅力ある住みやすい村づくりと一緒に目指す。
- ・食文化の維持を担っていきたい。
- ・自分たちが住む村の大きな価値に気づく「きっかけ」の場を創って行く。

これらの多くが親世代の「開業の動機」をそのまま引き継いでいる。それに、さらに自分の次の世代への思いを込めて地域の変革を進めていきたいという意志も加わっている。農林漁家民宿は確かに「家族の希望」の継承なのである。

おわりに

私が農林漁家民宿のサポートを自分のライフワークとして13年になる。サポートを始めたころすでに中山間地域の農山漁村の将来は危ぶまれていた。今となってはなお一層、農山漁村の実態は厳しさを増している。

集落の消滅におびえる高齢者のまなざしに接することなしにデータの数字のみを追うな

¹¹経営移譲だけでなく、今の経営者が誰なのか、についても興味深い実態がある。旅館業法における営業許可の名義は誰か。経営者のほとんどが「妻」の県、ほとんどが「夫」の県、ほぼ半々、と都道府県によって異なることが確認されている。

¹²大分県安心院のグリーン・ツーリズムを先導してきた宮田静一氏は「グリーン・ツーリズムによって家をつぶさないで（絶やさなくて）やっていける、自宅ではなくても地域の後継者ができている。」と語る。

らば、農山漁村は「住民たち自らがそこを出て行き、帰ってこようとしない場所」と見えてしまうのも無理はない。そうすると、いくら「国土の守り手」とし位置付けられても、農山漁村にそそがれる国民の視線はどうしても厳しいものになってくる。

- ・山間地域の農山漁村を都市からの所得移転によって維持し続ける必要はないのではないか。
- ・国土は、維持できるところ、維持できない所のゾーニングをされるべきではないか。
- ・文化も文明も栄枯盛衰があり、維持する方向の圧がないのなら減びても仕方ないのではないか。

これらの意見にも一理あり、反論に窮することもある。

しかし今回、「家族」という補助線を引くことによって、農山漁村に生きて住み続けた人びとの希望の具現化として「グリーン・ツーリズム」がはっきりとした輪郭をもって浮かび上がってきた。

私の持つ「家族」の概念は正鵠を射ていないかもしれないが、目を閉じると国土のすみずみで息づいている個々の人生が過去と未来を共有していて、一瞬一瞬の幸せが断続的につながっていくのが見える。「家族」と「希望」は小さく弱々しいが、農山漁村を回復させるという難事業は、その存在を抜きにして実現することはあるまいと、改めて実感している。